

# 青木鷺水序跋帳

小川武彦

## 要 旨

本稿は、俳諧宗匠としての『俳諧新式』などの作法書、『御伽百物語』などの浮世草子、『和漢故事要言』などの啓蒙書を編刊した青木鷺水の序文、跋文を刊行年代順に編集したものである。

凡例

- 一、青木鷺水の序文・跋文のほぼすべてを収録した。
- 一、序文・跋文の配列は、ほぼ板行年代順に従った。
- 一、年代は、刊記、序文、跋文にある年代の早いものに従った。
- 一、鷺水編刊のものは、書名の頭に○印、その他のものは▽印で示した。
- 一、翻刻にあたっては、漢字は通行のものに従ったが、できる限り原本の通りとし、また、私意による濁点等は施さなかった。

元禄四年

十一月

○誹諧こんな事

山巔倚軒発清風 河隔前村落眼中 是なんト居の 不断鐘声塵外事  
 詞とおほしくて誦しける暫留佳境所にて京の中なれとも眺望ハ思融  
 々ひかし山鴨川も手とくはかりなる二階から筆硯とりよせていさ  
 くかおもふ事を書(序)

元禄五年

正月

○春の物

蓬萊に両のもの源氏にほそひつめく物人にうちのもの衣類に夜のもの  
 のかるか故に春のもの  
 元禄さるのとし 春正月日(序)

元禄七年

秋

▽誹諧雛形

つたえ聞野々口の立圃は茶染の衣服をすかれたると也そハしらず世  
 に絵本おほく候へども沙室唐染ハふるめかしく覚江隴瑞流ハあまり  
 さし出けるにや近き重陽の上着ハ何といたし候べきやう舞と人の申  
 出待りけるに梨柿園信徳もかねく此事を思ひ至給ひつるよし凡若  
 干のもやうをこのミたりは好者等におほせて書しめ給ふ事に成侍り  
 其詞に天地ハ大極の絹也はたばりも天も長く侍る是を玄黄に染るに  
 森羅万像の糊を置キ喜怒哀楽の諸色を以て連誹不二のてにをはを形  
 どる也猶つぶさ成ル事傍に話して後の迷をとり永くすえくにつた  
 へて我か輩の節衣ともたちねとてミづからひみなかたをきりほどこ  
 し給へるなり

元禄七辰宿閑逢 御溝水頭之漚闌茂援衣念五日 鷺水艸之(跋)

元禄八年

九月

○合類誹諧寄垣諸抄大成

八雲御沙にかゝせ給ひつる彼桓公をわらひし車作りが智を得たらん  
 好士のためとにハあらでつれく草に云へる四部の弟子しらぬ馬お  
 ひ等が愚を誹道に入るの助ともなりとてくかの岡に草かるおのこ  
 しかなかりそありつゝも君が来まさん御まくさにせんと枝折の寄垣  
 を結事しかり 回(序)

右件の条々全く僻案を加へ管見にまかせて誹道を軽しめおろそかに思ひ取て此道の奥義を書顯したるにハあらず年頃古老の傍に供給し雑談のつゐてより／＼承り置或ハ先哲の文書に残し伝へて秘蔵しゝひつる家々の口決までからうして承り伝へ置たりし金言のはし／＼は紙の黒めるを捨ひあつめ梅園の門下に心さし深く問かハし給ふめる小子達の熟望にめてていさゝか電覽をゆるし侍り字くとして先輩の語ならさるハなく句々として古覽の言ならずといふ事なしかゝる中に間又下官か樗散をましへ侍るハ誠に宋野に株を守るの笑を残し遼東に豕をいたくの恥おほかれ共よしや此ふミの袖をもらすへきにもあらねハとて草案のまゝにさしおき侍りミン人爰を思ひゆるし給へ

御溝水頭之一瀕 青木鷺水撰述（跋）

### 元禄九年

正月

○手ならひ

童蒙須知 晦菴先生云人云讀書千遍共義自見謂誦得熟則不待解說自曉其意也 余嘗謂讀書有三到謂心到眼到口到心不在此則眼不看不細心眼既不專一却只漫浪誦決不能記記亦不能久也 三到之中心到最急心既到矣 眼口豈不到乎 謾りに先哲の文をうり用ひて吾か誹道入門の傍尔とに門葉の小子等あへて輕忽にする事なかれ

元禄九歲在丙子 正月踏哥節 御溝水頭之一瀕 鷺水（序）

十一月

▽誹諧住吉おどり

鳥帽子つけといへる詞ハ古く。笠付と名付しハ新しと。捨ひあつめて一小冊とし。円水是に序の発句を添て。はいかい住吉と号す。其句優美にして。剩和哥の神まで勸請し奉れバ。称宣が鳥帽子誹士の笠。其外輕口頓作。天の傘鉾のしたぶりにこそけ集り。さあ住吉さまの岸の姫松めでたさや。青木昏舟筆軒におゐて序すといふ。

干時元禄九年霜月吉日（序）

冬

▽世俗字尽

注に委からんとすれは事すくなし。野語述説。尔言便蒙これなり。事おほからんとすれハ疑推すくなからず嘉多言。まこと草是なり。合類節用の。漢書にもとめたる。和語対類の。和字をあつめたる。乾坤人事と。門々をわかつて。初学のたすけ。なきにしもあらず。なをこれをさへ。たとる人のためとて。旂林子とやらの隙あり此書を思ひたちて。部をいろはに。類を乾坤気形それ／＼の手引し。注を上。かたことをたになと。あまねくの人に。書とり世話やきて。誠あるすちめのかたはしも。しれと思はるゝなるへしと。井筒屋のあるし。重勝にかたる。

白梅園主人鷺水推量（序）



子を待て潤色をこふとしかいふ

元禄十丁丑年九月念五 御溝水頭之一瀝 鷺水(跋)

元禄十一年

二月

○誹諧大成新式

連歌の本式目ハ誰の定め置かれたりしもしらすとかや。建治の式目ハ。鎌倉藤が谷にて為相卿の述作ありしを。大納言為藤卿の。校考せさせ給ひて。始て新式と号しおはしましけるハ。彼先書の旧式目に対しての名なりけらし。其後相つゞいて。応安に。普光園殿の筆削。享徳に。後常恩寺殿の追加など。さま／＼の後勘をそへられ。異本まち／＼にわかれ混雑いかんともすべからざりけるを。間々見出る毎に。後のあらそひもいかゞして。文亀に牡丹花。逍遙院殿と。合体の今案に。今の新式追加筆の。世本を定られけるとなん。そも／＼我が道の掟ハ。松永貞徳の手に出たる式にして。水上を彼世々の御説に根ざし給へり。一説に云。おく山の木食上人。連歌にたやすからしめむとて。旧新の式を拾ひ。今古の格を正しあつめて。部をいろはに。巻を三才にあてゝ。世に残し給ひつる。無言抄といへるものゝ。猶分毫のたがひに。焉馬のあやまち有を傷覚して。名を滑稽の談に寄せ。法を新式の説にたづねて。此後連俳にたどる。好事物の杖とも柱ともなれとなん。始て枝折の道芝を得てしより。我が道の興隆。いくばく月いくばくとしとしといふ事を知らず。噓

毛吹狗子山井等のいにしへの文書ハ猶かのいにしへの道を守り。今の俗をあらたにせばやの心ざしふかく。筑波浅香山のこのもかのもさへ。おろ／＼尋ね見し。其人に有ざるハ。仮にもいひ出める言の葉もなければ。それが事ハさらにもいハじ。此ちかき四とせ五とせが程に刊つゞけて。柱立小がらかさをだまきわたましまきばしらなど。何くれの文書きそひて。こゝら聞もさだめぬ。格外の格もすくなからざるにうむじて。今此編集を思ひたちたる也。是なん貞徳の正法眼なり。立圃の骨髓也作者のつたなきハ目なかけそ。詞のたふときはわが道の先哲。千歳の今に猶。まのあたり斧斤をそへたまふ也。さるから此巻を。推して新式といはんも又むべならずや。といふものハ身ニとりておそれがましなどいハゞいへ。作者の根なしこと綴りて。世に耳をへつらふにこそあらめ。これさながら古人の金言なれば也

御溝水頭白梅園主 鷺水(序)

右若干の条々ハ梅園小亭に手を撰するの人々月次の席に並居て滑稽にあそぶ度毎先師立圃の旧式を得てん事を願へるゝのみひたすらなるか故に先刊よせかき手かゝみ手ならひに注し又叢明によせつる指南抄往斎湛水にあたへし誹林良材等の外あらたに明翁の奥秘を書そへ一座同志の懇望にむくひ侍りなをその玄々幽妙の志にいたりてハ蛩雪いくたひか窓前に積り春秋いくはくの甲子をかそふともいひつくすへきにあらずかし

御溝水頭白梅園主鷺水 卍(跋)

二月

○古今將基図彙

將は相なり。佐くる也。師ふるなり。國の衆を補佐し。師て。王に朝せしむ。是を將といふ。基ハ元なり。始也。智仁勇を兼備へ。文武の徳あきらかに照らして。諸の直をあげ。枉れるを錯ときは。国仁。草のごとくに靡き。聖徳。風のごとくに布。これ所謂。一家仁あれば一國仁を興し。万国。仁に懐く時ハ。天下に。將たるの始にして。その元とする所ハ。專政を百里に施し。智を方寸に練にあり。上古周の武王。三百六十牧の駒を製し。戯れに。猛將勇士の名を借り。虎豹竜鬼の勢の象り。群臣に示して指しめ。儉に賢愚得失を。窺ふの媒とし給ひしより。今にいたりて。猶しばらくも泯せず。遠く我朝に渡りて。尤。参伍八陳の理を知り。六韜三略の旨を諳するの。助なきにしもあらず。偏に武門の翫あそび深く。張良沛公の骨髓を探り。韓信顔越か肝膽を得たりとす。当世に至りて。四海永く干戈の光りを断。八州おのづから鐘鼓の誼しきなく。花晨月夕を。詩歌糸竹にたのしみ。朝雲暮雨を。琴基書画に倦の好士のミなり。これによつて。象戯の世に行るゝや。正に童蒙了角の手に洩して。天性稟受の智を。及第生長の後に。すゝめしめむとなり。然れども近世板行する物。ミな詰物作りもの而已おほく梓に鏤め市に販て。いまだ初心の手引を見ず。偶小將中將の二面は。知人あれども。小大摩訶大の。多少有事を伝えず。一日誹友

紀の鷺州に。錢別の序。今古希有の槃面。九凶と輯。小中の二面を加えて。十一とし。名付て古今將基図彙とし。是を椽にして。永く万歳の春に。むかハしむとしかいふ

御溝水頭之一遍 鷺水誌焉(序)

五月

○万葉仮名つかひ

才齋辭にあらざれば。今の事知がたし。智高仲舒にあらざれば。古の事猶弁ふる事かたし。ある日梅園の梓に。はひのほるものあり。莖は浅香山の百部根に似て。葉ハ筑波山の何首鳥に類せり。陝月に数枝半年に十尋。終に斧柄を用ひんとするの重陰となれり。人あり此名をとふ。予又何といふ事をしらず。むかし此草の芽さんとするや纔に一葉の屈めるあり。今この延蔓。たゞに万葉の老たる緑のミ。我レ名づけて万葉かなづかひと呼む公それおもふことありや。客猶しらざればこたふべき詞もなし。共に關茸のいやしき口をひらいてわらふ。

御溝水頭白梅園 鷺水謾書(序)

右若干の事ハ全く管見の拙き推はかりにまかせて僻める曲尺を世に配とにハあらす是又去御方の文庫にひめ置せ給ひて見る事たにたやすからざるをひたすら申おくりて此たひそれが中の万分か一を書頭し侍り穴かしこ誤のあらむハ小子か罪にこそあれ見む人いさゝかのそしりをもなしたまふへからすかし

元禄十一戊寅嘉月念五日 白梅園 鷺水(跋)

元禄十三年

三月

○三才全書誹林節用集

るつゝやのしげかつ。むめぞのよとぼそにいり来て。風翁が糸屑の増注を乞はれけるに。さしあひ去きらひの事。かなづかひなどはし／＼ハ。年ごとの桜になしぬれば。いまさら筆をそふべくもなし。さりていなぶねのいなみたうべき道かハ。ざれうたのたねハ。やおかゆて浜のまさごのかずかぎりとしもあらねば。よしやよのつねの世話に和語に。からくにのふミ我がてうのまき。これか礼が中よりとし出て。何くれの字をバかう／＼なむよめり。しか／＼の事ハとありかゝりなど。あつめても見ましやなど。おろかなる事にかしこきことハりをけがすとせしほどに。げむろくとらのよりおもひたちて。あけのとしハやおひ月までに。そこばくの紙をくろめ侍り。さてなんこれが名を。せつようといへるハ。彼しげかつのもとめなり。今やうもてはやすめる。見しちかきものにして。かたのごとく。ななへやすらかなるやうなればと成へし。いでやむかしより世におこなへるゝせつようハ。もろこしのふみにもよしありとかや。用を節にしてなど。ちかき比よりいひ出なるも。人にたより有のミカ。ひろくことを知らしむるの故もぞある。下官があつめしハ。そのかしこきすぢハいさまだしらず。節は時なりとかやもよめるよしふとお

もひ出るにまかせ。彼ざれうたのむしろにまじらはん人の。物わすれしたる節の用にたてよと。かいまろめてなげやりぬ

白梅園鷺水(序)

十一月

▽誹諧馬たらい

此作者需<sub>ニ</sub>序<sub>ヲ</sub>干<sub>ニ</sub>予<sub>ニ</sub>諾<sub>ス</sub> えほし付といふハ連歌めき。笠付は旅体になるべし。住吉をどり。御田うへなどハ神紙なり。殊に季をもつゆへ。去きらひむつかし。赤<sub>あか</sub>ほしハ揚枝屋に二句さるべし。田<sub>た</sub>叢<sub>そう</sub>笠<sub>かさ</sub>ハ誹<sub>はい</sub>言<sub>ごん</sub>にあらざ。梅<sub>うめ</sub>の花<sub>はな</sub>かさハ作りものにして実<sub>じつ</sub>なしと。しからは馬<sub>うま</sub>たらいと名<sub>な</sub>付<sub>つけ</sub>よといふ。心<sub>こころ</sub>ハと問<sub>と</sub>れて答<sub>こた</sub>へべき義<sub>ぎ</sub>もなし。いはゞすそをする時<sub>とき</sub>のそなへにとなれと也<sub>なり</sub>

白梅園主人 鷺水与焉(序)

元禄十五年

正月

○若<sub>わ</sub>ゑびす

その国のなにかし梅園<sub>むめその</sub>の宿<sub>やど</sub>りをとひける文<sub>ふみ</sub>のはしに今<sub>いま</sub>やうそこにもはやるめるとかいふゑほし付前句<sub>くつ</sub>沓<sub>くつ</sub>つけの勝句<sub>かちく</sub>をあつめてむかふるとしのたまものともなし給<sub>たま</sub>へかしなど云<sub>いひ</sub>こしける程<sub>ほど</sub>にかくばかり思<sub>いっ</sub>ひ出<sub>で</sub>る人々<sub>ひと</sub>をもそゝのかし猶<sub>なほ</sub>しらぬゑせ人の句<sub>く</sub>をも求めそへて一小冊<sub>せうさく</sub>となしける也<sub>なり</sub>題号<sub>だいごう</sub>の事<sub>こと</sub>ハいにし年常<sub>としじやう</sub>牧門弟<sub>ぼくもんてい</sub>の句<sub>く</sub>に

ありやうハ去年の夷のまた若し

といひしにもや候らん

白梅園鷺水 回(序)

元禄十六年

正月

▽万歳ゑぼし付合大全

人によりて見たても違ふものにや。むかしも飴を見て。程子といひし人ハ老人をたすくへきものぞとの給ひしに。盗跖といへる。のさ物ハ強盗する時に。戸の枢をしむるによからんと。いひたりしとそ。さればそれに似て侍る事あり。俳諧の稽古に。五もじを得て十七の一句となす事あるを。笠付といふハ。さながらの町人になり。ゑぼし付ときけば物めきたり。今こゝにかきつらねて。万ざいゑぼしといふハ。そのえぼしにもあらず。むめぞの梅のすき人ども。伝へて聞。たづねてさとしたる。いにしへ今の人の。付句のやうをもつぶりあへり。猶すへの。今の代に肩をいらゝぐる人々のかち句なる。えほしなるをも。しりへにそへて。句を求る時の。手かゞみにも。せばやとおもふから。何のわいだめもなく。みなりに次第せしとぞ。門人紫珊瑚の。かたり出給ひし。しからば此名のこゝろハ。かみがかみにてます。水の尾のみかどの御句より。つらねそへたれば。よもや。うちあるさまにて。下がしもなる人の。おほんならびに。出べくもなければ。すあほのゑもんつきおかしう。そりさけたるか

しらに。古きえぼし。引かふたるなめりとて笑ふ。よしそれハさまれ。このふみのはしがきせよと乞るゝ事になりてしかハこの夜話のありさまをしるしてなん。これがはしをかいくろめ侍りしか

白梅園鷺水誌(序)

宝永二年

五月

○和漢故事要言

不穀從來貧窶 而雖帶白魚癖 兼健忘不可奈何 病焉於此是每借一車必左蔡珍右瑞溪 有下会野情 恹鄙懷則拔粹拾葉 輯録之燈下 一卷而成 五堆者吾梅園輟耕之暇 配對客若話 席聽雨守晨枕 且欲以御風望 高蹤 為羽翼 上故時 投名家之二三手 探頤各自異論 採正校考之斧柯 焉撰成功畢 而在二鯁生 閱之數篇始為此被借去 終落 東市之書坊 播臭千株華云爾

宝永二乙酉夏 皇明白梅園(序)

七月

▽野良ほうし

書林の何かし此巻冊を持来りて此序を乞題号を見るに野良ほうしと印せり聞へたり此名それのの前句五もじをほうしとして老人の野良と仕立るにいつくありいつかぬありいけるありいけぬあり異類無尽なりといへともみなそれのの身をたすけ世に一枚かんはんとならるゝ是や彼野良役者の芝居本といへるにたよりけん出所なるへし

とおもふ所をありのまゝ書す

白梅園 鷺水（序）

世誹諧稽古之書鏤梓雖為紛紜多是有名無実而偽譽諂功者十八九也今此翻板真真者也云爾（跋）

十月

△誹諧七ツいろは（「万歳多ぼし付合大全」の改竄改題本）

桐の葉落そめてより程なく神返りの空あはたしく亥の子のあらし雪霜をさそひ人の肌骨に砭針する比ハ酒ならてほつこりとせぬ物と河豚の言煎鳥の手燭提もたた火燧の火の蒲団をあたまめ玉子の露の凝かたまりつゝ欠睡とならも只是火炉の一炬にあり永き夜の友待暮の寢覚とかくつれ／＼の慰に前句あんしたるに秀逸の句をねり出たる其楽陶々として尤其恩此こたつにありそれ人おろそかにせんや時に宝永二乙丙年 十月開炉日 白梅園鷺水戯書（序）

この年

○誹諧極秘伝抄

梅園座右銘 憨憨子日水在釜中非火不能執也種在土中非春不能生也愚在心中非学不能破也今天下学非不学也所学在于周欲而不為破愚是以世喪道道喪世道交喪之風扇之未已則將有不可勝言者至甲夫云々小子勉哉

神州白梅園主鷺水誌（銘）

宝永三年

正月

○御伽百物語

今比数條ニ筆ヲ染ル事ハ我カ白梅園下ノ小子心ヲ滑稽ノ句ニ委子詞ヲ風雅吟ニ効ト云氏動モスレハ雜細遊戯ノ放心ニ引レ心ノ駒ノ恣ニ食シト誇ルコアル輩ヲシテ暫吾道ノ西東アルコヲ教エ規矩準繩ニ方寸ノ彎ヲ撓ント也猶余ノ口決タルハ秘シテ侯異時ト云

皇明師範白梅園鷺水源兼中誌（跋）

春くらし。九かさねの内も外も。分てあらしの。けふハ長閑きと。打ずンして。外面のかたを詠やれば。来ぬ人も誘ふ斗。漸綻。そむる梅が香。いとなつかしう。夕日の影ながら。袖に移り。心にしむる夕風ハとぞ。先思ひ出る比。我か梅園の戸ほそに。例の。二人三人ぞ見え来つる。それが中に。珍しかりしハ。此四五年が程。あづまの方に。浮岩ありきて。名ある山。勝たる地。跡たれます神の社。行ひすませしといふ仏の寺。尊き隈々。残りなく修行し。行ひ歩行たりとかいふなる聖の。いと老ほれて。頭白く。眉髭なども。黒き筋なしと見ゆるをぞ。友なひ出きたる。こハ如何なる人にか。思ひの外にとや。もてなさまし。そも何人そと問せたるに。此将来人のいふやう。是ハ六十六部の御経を治て。諸国をめぐり。有とある。うきめ。恐しき事。見もし。聞尺して。此春ハ爰に物し給ふ。世捨



近代諸国因果物語六卷ハさきたちて梓に入し百物語の撰次後編なり  
猶此統ありて都合十八巻を全部とし世と共に是をもてあそひ語り伝  
へ聞およほし兒女童蒙の目をよるこはしめ且ハ覆轍の戒となすの  
助ともなれとおもふ心さしあなりといへとも筆いとまなく日月しは  
らくも住る事なきにいちはやく年も暮ぬ後集いまた功おはらさる所  
あるか故に今猶桜かもとに花を催してひそめり今我梅園の梅の栄へ  
を羨かほに眉こもる柳の糸永き春のうちにハ此後編もかならずと  
いひてやみぬ

白梅園鷺水（跋）

宝永五年

正月

○新堪忍記

神道におゐて土金の伝あり。慎の道なり。儒家に五常といふ事あり。  
信の一字にあり。修多羅蔵に。四重五戒の律あり。三教すべて忍を  
以て要とす。其他の道におゐても又然なり。老荘の説。揚朱の言。  
堅白の論。朴樸のあらそひ。纒も心上に弁し。舌頭に頭らるゝ類の。  
世に提準て。人を撓んとするの。あらゆる理屈。ミな是。忍の一  
字にあり。されば。人の君としてハ。民を使ふに時を以てし。土階  
三尺芥茨きらす。くたれるに聞て。あがれる代の政をしたひ。民  
を愛する事。子の如くに仕給ふハ。一天の君の忍といふべし。善を

見てハ賞じ。悪あるを罰し。私の仇を以て。公事を妨ず。君をた  
すけ。政事に邪なからん事を思ひ。命を軽んし。義を重んずるハ。  
臣たる人の忍なるべし。此ゆへに。唐雎ハ。布衣の怒の怒を説て。  
始皇の舌の刃を折。文王ハ。手を拱ぎて。涓浜の翁に問給へる。い  
づれか忍の外なりといはん。是らハ皆写文章創の。大義に心ありて。  
万乗の上をのぞみ。名を不朽に伝へんとするの忍なり。誰の人か一  
忍にしたがハざらん。今此七巻にしるせるの忍ハ。彼君臣の。高く  
遠き。和漢の人の。よきためしとせる忍にハあらず。近くいやしき  
が忍の。柱に膠し。舟を刻めるたぐひなる。匹夫蒼生の忍の。纒に  
證ぜられ。しばらく世諺に残れるを拾ひ輯て。稗官小説家の忍に比  
ず。彼をもつて是を見れば。君子の敢もてあそぶべき物にハあら  
ずといへども。兒女童蒙のともがら。翫弄久しくして。自悟発得の  
時いたり。些も忍の忍たる道を弁へしらんにおゐてハ。又小き補ひ  
なきにしもあらざるべしとて。年来日ごろ。見聞の夜話の端々。  
思ひ出るにまかせ。次第混雑のまゝ。草をなし。是を不忘の備に構  
ふといふ。

白梅園鷺水 印（序）

人もの毎につきて堪忍へき事あるをも忍す身のため人のため善につ  
き悪につき行す忍の忍き筋ありやなしと。忍。こともなく心ひと  
つにおもひ忍て君子の人に忍をなす輩に教をなさんとてしハらく  
世俗の情に随ひ忍の字の歌三首をつらねて此書の開題とせり凡天地

あらゆる事此歌の心に洩教なく押ひろむれハ三界を挾しとし巻て懐にする時ハ微塵猶空なり此堪忍記七巻の本意またく如斯うかれて見る人実を以て見る人忍の心を見出して悦ぶ人思ひあたれる所ありておもしろかる人身に引あてて笑止かる人是を戒の鏡として向後をたしなまんとする人詞の拙きを以て此事を欺そしる人彼か智かく長からし是全く潤色せりと偽る人あらん各の意味ハ目前の境界にあらハれ千変万化見む人の心のむかふ所に随ふへしとそ(跋)

### 宝永六年

八月

#### ○新玉櫛笥

それ水滸西游のあやしき。著聞十訓の艶なる。和漢まちくしに記せる。其中もつとも。幻妄の事ありといへとも。おのく至理の存するあり。抑梅園の不穀か編る所ハ。是に反せり。内にハ劉孝標か書淫を嗜み。外にハ康衢か客作の名を得たる。癖ありといへとも。天生稟受の洒落。いかんともすへからず。道に進ミ。徳を高うするの智なく。徒に頤を解。齒を露すの談にふける。身にしあれば。終日。左思か三都賦を練るにならひ門庭溷濁。ミな筆硯といへとも。潜夫昌言の。悶を遣にもいたらず。怪異希有の。夜話のはしく。ちかき遠き。耳に落たるを。不忘の備へにと書とむるに。漸六巻の書編に及ふハ。清氏か婢の。乞て猶。枕にとやいはまし。その事の真偽ハ。彼揚大年か。伝灯録を刪考せしに類して。ミつからいまた。

隻眼をも具せず。後来の朱子。これを譏る事なかれ。

#### 白梅園鷺水 回(序)

### 宝永正徳享保頃

#### ○高名太平記

臣事レ君 以レ忠 忠とハ何そ己を尽すをもつて忠とすとかや今此十巻に述る所の数篇ハ普く世間の人口にある若話たりといへとも其忠におゐてハ今古一片の忠なるへし後の見人その章句鄙くその文義の野なるハ敢て採事なかれたとハ、人あり口吃して音便清からすと いへとも意見におゐて訥せず噤せざるか如く此巻また一字の忠のみ

#### 白梅園鷺水 回(序)

### 享保九年

十月

#### ○大学講義俗談鈔(写本)

#### 図書講談之発端

先此度此四書講セヨト人々御望ニ任セ談セントスルノ志ヲ発シタル所世上通例ノ講義トハ違ヒ引書出処ヲ引カス来意ヲ求メ談セス日夜通用ノ言語ヲ以テ四書一部ノ学ヒノ大筋目ヲ打返シク一貫ニ談セントス其意趣ハ今此四書ニ於テ日本ニ弄ハル、事年己ニ久シク上古王政ノ時洛中ニモ学校アリ禁裡ニモ大学寮 学館院 肆学院 観学院ナト、テ殿閣ヲ設ラレ積奠マテ執行ハレ古註ヲ以テ講セラル夫ヨ

リ朱子学ニ写リ古註ヲ見破リ専ラ新注ヲモテハヤサレテ己来余カ若年マテ 固菴順成 由的ノ三師哲足ノ如ク立テ学校ヲ開キシヨリ次第ニ末書モ多ク集解モ出ツ、キテ章句蒙引ナトノ類ニ引書証本ナ寧ニ出タレハ広ク窺ヒ遠ク尋ル悉カラサルヲナキ世ナリサレハ今ノ世ハ注脚ソナシ 講本ヲ持ルニ易ケレハ町々所々ニ講セサル方モナリ悉カラサル説モナシ今吾此中ニ罷出テ何ヲカ云ハン偏先輩ノ余唾ヲ舐ルヨリ他ナシ幸去々年春宮刻アリシ六諭衍義ト云者経学ヲム子トシ道ニス、ムルノ書ニ孔孟ノ心理遂ニ説了 然レ此書頑愚盲昧ノ少人ヲノ耳ヲ提詞ヲ暈ノ此心理ヲ説論ントスル書ナルカユヘニ古往聖賢ノ語ヲ引ス 古語故事ヲ交ヘス今ノ大清康熙帝ノ民ノ常ニ云俗語ヲ以悉記タルヲ且ルニ我心動シカハ其年ノ八月ヨリ先此書ヲ以テ講シヲハリス惜哉此書未書ナクノ俗耳ニ遠ク意味通シ難キ故ニ世ニ用ラル、事絶タルニ似タリ是大清ノ茫鉞力作意ナリ今我又此心ヲ好シ此度ノ講談も又当世ノ鄙俗ノ語ヲ以テ一篇ノ大意ヲ説其余ノ古意出処ハ各未書ニ考ヘ知ヘシ此故ニ二程ヲ妨メ朱子ノ出処マテ講セス只本文ニカ、ハリテ説ナリ

白梅園鷺水(発端)

享保十年

正月

○誹諧をくるま

人有り窓前に肩脱て蹲り手に金葉一片を持てり黄昏に唾はきし平明

に押拭ふ予問ていはく公何をかする答て云此は是誹諧のをくるまなり

歌仙堂(回)(序)

△附記▽

本稿をなすにあたり、天理図書館綿屋文庫を初め東京大学附属図書館酒竹文庫・竹冷文庫、京都大学附属図書館・同文学部図書館頼原文庫、国立国会図書館、東京都立中央図書館、大阪府立図書館、石川県立図書館、金沢市立図書館、富山県立図書館など、個人では、前田金五郎先生、大内初夫氏、谷協理史氏、雲英末雄氏、加藤定彦氏、金井康氏に御教示に与り、お世話になった。末筆ながら各位に謝意を表します。

昭和五十九年八月廿日

(昭和五十九年十一月九日 受理)